

# 伝統的な言語文化の掘み直し(上)

——『伊勢物語』初段、『今昔物語集』『馬盗人』などを例に——

竹村信治

本稿は、平成二三年一〇月に高知大学で開催された第一二一回全国大学国語教育学会の第一日パネルディスカッション「伝統的な言語文化の学習指導を考える——国文学・漢文学・日本語研究者の立場から——」（二十九日午後三時一〇分～五時二五分）において発表した内容の詳報である。稿者に依頼されたのは「国文学研究者の立場」からの発言である。要旨は『発表要旨集』に所収の文章がほぼ同文で『国語科教育』第71号に掲載される（サブタイトルは「古典研究の立場から」）。ここでは当日に資料を用意して発表した内容を報告する。なお、パネルディスカッションの趣旨は右の『要旨集』もしくは学会誌の渡辺春美氏「趣旨説明」によらねたい。

本論文中、枠内の記事は「要旨」本文である。また、成稿に際し、論旨を明確にするため、発表では時間の関係で割愛した内容、質疑での発言などを加えて、若干の補足を行った。

## はじめに

「法的根拠をもって設定されている」「伝統的な言語文化」（稿者補：渡辺春美氏「趣旨説明」の文言）の学習は、2008年1月17日中教審答申、その後の学習指導要領改訂案、公示学習指導要領によれば、次の2点を目標としていると判断される。

○「体験的、身体的」理解（＝「音読、語記・暗唱」「朗読」による「言葉の美しさやリズム」の「体感」を通じた「読解力」の「基礎的・基本的な知識・技能」の定着（＝「言語の能力」にかかわる「暗黙知」の形成）への貢献。【小学校】

○「古典に触れること」「古典の世界を楽しむこと」「その世界に親しむこと」（中学校）「古典の普遍的価値や、その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味について考えること」（高等学校）を軸とする学習を通じた、教育基本法第二十五条「伝統と文化の尊重、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し……」の達成。【中学校・高等学校】

したがってその学習指導は、音読、暗唱、朗読を中心に、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取ったり、登場人物や作者の思いなどを想像したり、解説の文章によって昔の人のものの方や考え方を知ったり、ことわざや慣用語、故事成語などを使ったり、古典の一節を指定して古典に関する文章を書いたり、内容や表現の特色を理解して読み味わったりさせ、最後にそれらを「我が国」の「伝統と文化」として称揚しておけば済むのだから、議論するまでもないことだ。そこでは、学習者がそれを楽しく感じてねばり強く取り組むようにするためのコミュニケーション、パフォーマンスが「指導の工夫」ということになる。

こうして、『学習指導要領』の求める「伝統的な言語文化」の学習とその指導には、実は議論すべき点は何もない。しかし、にもかかわらず議論の必要が感じられるのは、そうした学習指導、すなわちカノン化された「伝統的な言語文化」の鑑賞主義的で活動本位の、知的刺激の欠如した扱い方が学習者と「古典」との間に横たわる距離を拡大してきたことを、我々が知っているからだろう。

とすれば、『学習指導要領』を越える議論が必要となり、それは当然「法」を問い直すことになる。焦点は当面、①「伝統」、②「言語文化」、③「親しむ」本義の3点。なぜなら、これらの掘み直しが「古典」の非カノン化、そして知的刺激にいくぶんかは触れる「古典」との出会いの実現につながる途と見込まれるからだ。

## 一 「伝統」

『中学校学習指導要領解説・国語科編』1, 3, (5)「伝統的な言語文化に関する指導の重視」項には、「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらに親しみ、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるように内容を構成している。」の文言が見える。力点は教育基本法へと接続していく後半にあるのだが、ここでは前半に着目したい。

「伝統」は現在の根拠を過去に求める人びとにとっては、不変だが、継承する人びとにとっては常に更新されるものである。古典作品でいえば、「縁起」（神話、始祖伝承、寺社本地物など）は前者の例。後者の例には諸ジャンル内の諸作品があり、和歌や物語、芸能はそれぞれに表現をめぐる史的展開をもっている。前者も「不変」を標榜するが、その内容は語りの現在の変化に応じて変貌する。征服者は被征服氏族の神話を組み込んで自らの神話を増幅し、あらたに始原を創り出してはそれを「不変」と騙る。寺社、芸道の縁起も同様である。

ならば、「伝統」は変化、更新の持続的な展開こそがその本義となる。継承（読みと表現）の間の改変、更新、創造、あるいは「不変」の詐称といった行為と出来事に焦点をあてた「伝統的な言語文化」の教材化、学習指導ができないか。

趣旨は、「創造と継承を繰り返しながら形成されてきた」とされる「伝統」の本義を「変化、更新の持続的な展開」と掴み直し、「継承（読みと表現）間の改変、更新、創造、あるいは不変」の詐称といった行為と出来事に焦点をあてた「伝統的な言語文化」の教材化、学習指導」を提案するところにあつた。

事例に引いたのは『伊勢物語』。三段階増幅成立説（片桐洋一『伊勢物語の研究』一九六八年、『鑑賞日本古典文学』伊勢物語・大和物語一九七五年）、あるいは院政期における諸本の生成（狩御使本など）や藤原定家による本文改訂（小論『伊勢物語』芥川段小考』本誌48号二〇〇七年。なお、後藤康文『伊勢物語誤写誤読考』二〇〇〇年、参照）などを加えればさらに数次の変貌を内在させているらしいこの作品は、「伝統的な言語文化」一般に認められる「継承（読みと表現）間の改変、更新、創造」の典型として、議論を分かりやすくすると考えたからだ。

『伊勢物語』は章段の増幅や諸本の生成、本文改訂ばかりでなく、その解釈史においても「改変、更新、創造」の跡をかなり鮮明に残している。多くの教科書に採録されている初段「初冠」について言えば、面妖をもつて知られる「中世伊勢注」『冷泉家流伊勢物語抄』は「女はらから」を業平妻の紀有常女（書陵部本「少納言刑部大輔紀有常が娘、春日の里に姉妹あるを、はらからと云也。」とする、「創造」）。これは『古今和歌集』卷一五・恋五・七八四番の詞書「業平朝臣、紀有常が女に住みけるを」と『伊勢物語』第四一段「昔、女はらから二人ありけり。」とを関係づけたものである。業平が通つた家は『古今集』にいう有常邸。後者登場の「あてなる男」が業平ならば

彼の通つた「女はらから」は業平妻有常の女たち。第四一段「女はらから二人」を歌の縁（紫）↓「若紫、「芽もはる（春）に野なる」↓「春日野」で結びつけられ、初段「女はらから」も有常女たちとなる、というわけだ（福井貞助『伊勢物語生成論』一九六五年）。これを承けて伝源経信『和歌知頭集』（書陵部本）は、何に拠つたものか「この時、あねは十九歳、いもうとは十七歳也。」（因みに『源氏物語』宇治の大君・中君は薫が八宮に通い始めた頃、二〇歳と一八歳）とする（更新）。それらを否定するのは中世末・近世初の細川幽齋『伊勢物語闕疑抄』で、「古説は、紀有常が女兄弟有といふ。不用之。よみ人しらずなどの類にすべし。」とある（改変）。現在の注釈書は「闕疑抄」説を支持しているが、「女はらから」を姉妹二人とする点では中世古注を継承している。これに異を唱えるのが「女はらから」＝業平の妹説（吉田達『伊勢物語・大和物語 その心とカタチ』一九八八年）。書陵部本『冷泉家流伊勢物語抄』は「ついで面白」に「若紫の哥を讀て、其次にみちのくの忍ぶずりの哥を詠する也。其故は彼が忍ぶ夜にしのおずりのこ、ちを讀、我哥の儀とおなじきが故に詠ぜし也。」と注し、「われならなくに」に「此哥は源氏左大臣とをる卿、河原の院にすみけるに、妹をおもひかけてよめるといふ也。」と記す。したがって、吉田氏説を荒唐無稽のものとして断じ切ることはできない。しかも『伊勢物語』四九段「昔、男、妹のいとをかしげなりけるを見りて」や、それを絵に描いて戯れる『源氏物語』絵角卷の匂宮と女一宮の傍証もある。吉田氏論旨は『伊勢物語』題号由来の謎を解くところにあり、これにかかわって光仁天皇内親王の酒人に着目、『東大寺要録』が「容貌姝麗、柔質窈窕」為性倨傲、

情操不修」「任其所欲、淫行弥增」と伝えられる酒人内親王が伊勢齋宮となつての春日の里での潔齋中に兄桓武天皇(山部皇太子)と禁忌を犯した一件を初段に重ね、この初段が呼び起こす風聞、読者の内なる業平曾祖父桓武帝(父阿保親王は桓武孫、母伊都内親王は桓武皇女)をめぐる記憶が題号の本縁だといふのだが、こうしたところからも初段解釈(女はらから)≡業平の妹説は「創造」されるといふ次第だ。

初段をめぐつては古來さまざまな説解が行われ、「創造と継承を繰り返しながら形成されてきた」といふ「伝統的な言語文化」の、その「伝統」「形成」の内実を考ふる恰好の教材となつてゐる。たとえば「おもほえず、ふるさとにいとほしたなくてはなかりければ、心地まどひにけり。」——これはふつう「昔男」のようすを語るとされる。しかし、近世の宝暦二年(一七五二)ころには「おもほえずよりまどひにけるマテ思ヒカケヌコトユヘオトロク也。コ、チマトフハ恥ル也。恥テ奥ヘイラントスル也。サルケシキヲ男ミテヤカテ哥ヲ書テ從者ニモタセセル也。ソレヲ追ツキテト云也」(国会図書館蔵「勢語通」、加藤景範頭書入、前掲吉田著書所掲の影印による)と、「女はらから」の心中を描くとする解もあつた。初段を「昔男」の物語ではなく「男と女」の物語として「女はらから」の姿をもさぐるこの読解は、「ついでおもほしきことともや思ひけん」を「女はらから」の思惟とし、末段の源融「みちのくの」歌を「女はらから」による借用返歌とする先行古注理解(書陵部本業平集、「和歌知類集」、牡丹花肖柏『伊勢物語旨聞抄』、「伊勢物語間疑抄」等)とも通じてゐる。吉田達氏はこの景範書入注の説を『大和物語』二三段の

後蔭中将女や一七三段の五条の女にも見出だされる「(かいま)見られる者」としての激しい羞恥の情」と関係づけて妥当性を説く。その可否はともかく、ここでは、こうした解釈がそれらの既有知識や物語観(物語「男と女」の物語)にかかわつてゐる点が重要である。「枕草子」の清少納言も内心はともあれ「見られる」ことを「羞恥」する女の一人だし(大進生昌が家に)段「宮にはじめて参りたるころ」段など、「源氏物語」の空蝉が光源氏を拒否するのもこれによる。はたまた「鬼と女とは人に見えぬぞよき」と案ずる「虫めづる姫君」もいた。そうした古典世界が養つた女性観も注釈者の解釈行為には参与してゐるはずである。

このことは「おもほえず……心地まどひにけり。」の主体を「昔男」とする説についてもいえる。吉田氏はこれにも『竹取物語』の「世界の男」、『大和物語』一五五段「安積山」の「内舍人」などを引いて、「(かいま)見る者」の「心情内に惹起された」「爆発的な心的エネルギー」とそこからの「劇性に富む行動」の範例としてゐる。このモチーフは、たとえば『古今和歌集』卷二・恋一・四七六番の詞書「春日の祭りにまかれりける時に、物見に出でたりける女のもとに、家をたづねてつかはせたりける」とその壬生忠岑歌「春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも」など、<sup>4</sup>色好み<sup>5</sup>、古典世界に広く散見される。つまり、「昔男」説は<sup>6</sup>色好み<sup>7</sup>譚をめぐる既有知識や觀念に裏打ちされているわけだ。「昔男」説からは、「住へきさまにもあらぬ故郷におちつかぬようにてあるを、かつはあはれふ心に、いと、こゝちのまどふ也。」(契沖「勢語臆断」)や、そこから物語世界に同化して『源氏物語』の宇治八宮

没後の大君・中君や薫をかさねた「ふるさとのさびしげなるに、おやもなき女はらからの住みたらんは、いといとあはれにて、見る人の心とまるべきさまに、かきたるなり。さる女を見て、こ、ちまどふぞ、もの、あはれ知る人にはありける」(藤井高尚「伊勢物語新釈」との見解も生まれている。『色好み』)「あはれぶ心」ある人「もの、あはれ知る人」。藤井高尚が本居宣長門下であったことを思い出せばこの発話の由来も知られるというのだが、ここにも古典世界が育んだ観念(『色好み』観、男性観)の参与は認められる。

『伊勢物語』所収話題との関係づけ。既有知識や観念の繰り込み。それらによる解釈は師資相承の間に流派(共同体)の「伝統」となるが、それぞれの解釈の発端はいつかどこかで誰かが行った一回的な関係づけ、繰り込みにある。そしてそれを促すのは「伝統」とは異なる解釈者それぞれの作品像であり古典像であり、さらには解釈者がそれぞれの(いま・ここ)において形成している世界観である。「伝統」はその度に改変され、更新され、創造される。

\*

このことは初段末尾の「昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける。」の『みやび』解釈についても指摘できる。この『みやび』は、古来、

A巧みに情景に適合した本歌取りの歌を表現し伝達した手順を「みやび」と称したのだとする説(『和歌知願集』「みやびとは、ふるまひなり。閑の字をかきて、みやびとも、ふるまひともよめり。されば、せちなるふるまひしける人となんいへり。」)

B「みやび」を「好色事」と解する説(徳江元正蔵『冷泉家流伊勢物

語抄)「みやびをなむしけるとは嫁(と)書ク也。とづく心也。是までは情をかくる事と可心得也。或は業(平)は十七ニシテ此女ニ逢レタルヲ、伊勢(作者)ガ、むかし人ハかくいちはやきみやびをなんしけるとは書也。)

の二説に解された。現在は前者Aを是とし、さらに進んで次のような「みやび」観、『伊勢物語』観も導かれている。

●片桐洋一氏(『鑑賞日本古典文学』「伊勢物語・大和物語」一九七五年)平安時代における「みやび」という語の用法と「みやび」にあてられた漢字の用例を考えると、「みやび」とは、俗塵、すなわち宮廷の官僚としての生活から超越し、自由の時を過ごし、美しいものを美しいものとして追求してやまぬ「精神的自由」を言うと思えるべきだと思う。

●秋山虔氏(新日本古典文学大系『伊勢物語』一九九七年)

「昔人は……」の一文はこの段の総括であるとともに伊勢物語全体の主題をも暗示する。(初段脚注)

業平はけつして体制に忠実な良吏ではなく、政治の世界に背を向け、歌人として生きるという側面において、真の意味での人間の回復を求めたのだといえよう。そこには、外面はともかく、現実の権勢何するものぞという貴種の矜持——それは現実には、公的には何の有用性もないだけに、かえって自在でありうる、したたかな精神が潜在していたといえよう。そのような業平を支持する、時代・社会の精神的基盤、あるいは生活感情が、業平を、業平自身さえも関知することのない「を」とこへへと変貌させたのだといえよう。(解説「伊勢物語の世界形成」)

これらは高等学校での初段教材研究の起点、基盤ともなっているものだろうが、こうした解釈は以下のような分析との対比においてその近代性（精神的自由）「人間の回復」「自在でありうる、したたかな精神」を露呈するものとなる。

\*

かすが野の若紫のすり衣

しのぶの乱れ限り知られず

この「昔男」詠は次のように解されるのが一般だろう。

この春日野に生えている若々しい紫草のように匂いやかななを前にして、わたしのころは、その紫草の色に染まった見事な摺り模様のように、こんなに美しく乱れてしまった。あなたへのがれをじっと胸の奥にこらえていた今のわたしのころは、こんなにも破れて、まるでどこまで乱れていくのかわからないくらいに——。（吉田達、前掲書）

「若紫」を「女はらから」の喩、「しのぶ」を「信夫」「信夫」の掛詞とみての解釈で、ここでは諸注のうちもつとも詳細な訳を引いたが、古典教室で示されるものこうしたものだろう。ところがこの歌について新日本古典文学大系『新古今和歌集』は次のような異なる解を示して注目される（巻二一・恋一・九九四番・詞書「女につかはしける」・在原業平朝臣）。

春日野の若紫で摺った摺衣のような美しいお姿、私の心はこの信夫もぢ摺りの乱れ模様のように人目を忍ぶ物思いで乱れに乱れています。

「しのぶ」を「忍ぶ」に解している点の異なりは今問わない。重要

なのは傍線部の異なり。前者が「その紫草の色に染まった見事な摺り模様のように」と、上句と下句とを聯絡させているのに対して、後者は両句を分け、上句を「女はらから」への呼びかけ、「乱れ」の喩は下句のみとして「この信夫もぢ摺りの乱れ模様のように」としている点である。これは脚注解説に「男が着ていた信夫摺りの狩衣に若紫の摺衣を対照してそれを女にあて、本歌の「誰ゆゑに」を変えて相手を顕わす。」とあるのに対応している。「伊勢物語」で本詠直前にある「その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。」はここでいわれる「対照」の伏線。したがって、一首の歌句構造を伏線に即して解析するこの新大系解釈の方が理解しやすい。

にもかかわらず本詠について前者のような解がひろく行われているのは、「しのぶの乱れ」を「垣衣草（シノブグサ）の形を紫の色もて摺たるをいふ」「垣衣草の形の乱れたるをもておのが恋のみだれにたとへたり」とする賀茂真淵『伊勢物語古意』説の影響下に、「若紫のすり衣しのぶの乱れ」を本段末尾に「といふ歌の心はへなり。」を添えて提示された源融詠、

陸奥のしのぶもぢ摺り

誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

の「しのぶもぢ摺り」のことと見なすからである。真淵「垣衣草」説は、本居宣長が「玉勝間」五「しのぶもぢずり」項で「顕昭の注」「契沖が勢語臆断」を引いて否定し、「陸奥ノ信夫郡より出せりしことは、論なきをや」と論断している。また、見たように、「若紫のすり衣しのぶの乱れ」は「若紫のすり衣」「しのぶの乱れ」のそれぞれが「女はらから」「昔男」の喩としてある。だから、「そ

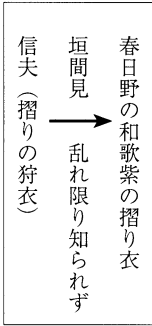
の紫草の色に染まった見事な摺り模様のように、こんなに美しく乱れてしまった。」とはならない。誤解である。

ところで、新大系『新古今和歌集』は「昔男」の喩としての「しのぶの乱れ」を「この信夫もぢ摺りの乱れ模様のように」と訳出しているが、これはいくぶん不正確である。本居宣長は右の真淵説否定の論脈の中で次のように述べている。

そは次に、古今集なる、河原ノ大臣の歌を出して、「といふ歌のこゝろばへなり」といへり。これ「しのぶのみだれとよめるは、しのぶずりの乱れといふ意也」と、しらせたる也。

これは、融歌の提示をもつて初段が促す読みの流れ（しのぶのみだれ）→「信夫もぢ摺り」→「信夫摺りの乱れ」を辿り直してみせたものだが、それを「昔男」詠の第五句「限り知られず」と連接させるとき、「昔男」の喩は「信夫摺り」そのものということになる。さればこそ本詠直前に「その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。」の補助線も引かれていたのである。

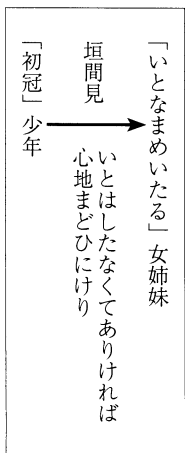
こうして、「春日野の」歌は、本歌融詠をも組み込んで図示すれば左のごとき構造をもつたものということになる。



我ならなくに

ネエ、「春日野の若紫の摺り衣」チャンタチイ、「信夫摺り」（ボク）はキミタチを垣間見て「乱れ」がいつそう「限り知られず」

なっちゃったヨオ。キミタチのせいだヨ。——やや軽薄ながら、これは初段の次のような展開とも符合している。



ちなみに、「いとなめいたる」は先の国会図書館蔵『勢語通』の景範書人いう「なまめくハ男子ニ思ハれんとするかたち也」とあるのがよい。石田穰二氏はこの部分を次のように解説している（角川文庫本『新版伊勢物語』補注一、一九七九年）。

古くは「なまめく」の形しか見出せない。たおやかな女の美しさを言うのが、色つばい、こびをふりまく、といった方向と、心がやさしい、風流だ、といった方向に分化して使用され、それがやがて「なまめかし」と共存して、『枕草子』『源氏物語』に一般に見られるように、優美というに近い美的範疇をあらわす語として成長をとげたのであろう。

また、岩波『古語辞典』「なまめく」項は「ナマは未熟・不十分の意。あらわに表現されず、ほのかで不十分な状態・行動であるように見えるが、実は十分に心用意があり、成熟しているさまが感じとられる意。男女の気持のやりとりや、物の美しさなどにいう。」と解説し、第一義「何気ないように振舞う。何でもなげに振舞いながら気持をほめかす。」に『伊勢物語』第三九段の「この車を女車

と見て、(色好ミノ男) 寄り来てとかく・くあひだに」を引いている。したがって「いとなまめいたる」を「たいそう若々しく優美な」(『鑑賞日本古典文学』伊勢物語・大和物語) とする訳出はふさわしくない。「昔男」が「女はらから」に「摺り衣」の喩で呼びかけたのは、そこにも「なまめいたる」「乱れ」があつたからだろう。

古京・春日野の「たおやかな」「女はらから」の「何でもなげに振舞いながら気持をほのめかす」姿を見て「心地まどひ」、「着たりける狩衣の裾を切りて」かかる歌詠を「をいつきていひやりける」「初冠」の「昔男」。そこには「精神的自由」「人間の回復」「自在でありうる、したたかな精神」などは認められない。

\*

こうした軽薄にも見える「昔男」の振る舞いは、しかし「世界の男」「色好みといはるるかぎり」(『竹取物語』)の者たちに通有のことで怪しむに足りない。先にも引いたとおり、壬生忠岑も「春日の祭り」で見かけた女の「家をたづねて」「春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも」などと声をかけているし、そうした「ついで」を捉えての懸想は「籠もよ 御籠持ち」(『万葉集』巻頭歌と呼びかけたり引田部赤猪子(『古事記』)に婚姻を約した雄略天皇など、古来、枚挙に遑がない。また、「なまめいたる」女も、唐土に宋玉「登徒子好色賦」(『文選』卷一九)の「東家之子」があり、本朝にも『源氏物語』の源典侍、和泉式部、さらには小野小町などがいる。また、彼女たちを待たずとも、すでに『万葉集』にも現れる。卷二・二二六番詠、

遊士(みやびを)とわれは聞けるを

屋戸貸さずわれを還せり おその風流士(みやびを)の石川女郎はその代表だろうか。そして、この石川女郎詠をめぐる一件は、すでに岡崎義恵「みやびの伝統」(『文学』11-11一九四三年)が指摘しているように、『伊勢物語』初段の「いちはやきみやび」を考える上でのヒントを与えてもくれるものでもあった。

この歌は、左注によれば、石川女郎が宋玉「登徒子好色賦」の「東家之子」同様、西隣に住む伴宿欄田主に懸想し、媒人も得られないまま自ら訪問して思いを遂げようとしたが果たせず、帰宅後に「すでに自媒の愧づべきを恥ぢ、また心の契の果さざるを恨」んで詠み、以て「譁戯」に及んだものという(別伝が「十訓抄」七13に見える)。「なよびたる」女の働きかけに気づかない男、それを石川女郎は「おその風流士」(鈍い「みやび男」となる。この田主もまた「登徒子好色賦」の、「東家之子」三年の思慕に感じない宋玉にかよすが、右の歌に出る「遊士」「風流士」について、新日本古典文学大系『万葉集』一の当該歌脚注は次のように述べている。

和語「みやびを」は「宮びな男」、即ち宮廷風・都会的に洗練された男をいう。(…中略…)漢語「風流」は、超俗脱俗を中心的な意味として、高潔・洒脱・放逸・好色の意までを含む。この歌(二二六)では、漢語「風流」の意味と和語「みやびを」とを重ねて「色好みの男」の意、次の歌(二二七)では、節操高潔の人の意を「みやびを」に重ね用いた。結句「おその」は、「遅(おそ)」で、遅鈍・愚鈍の意。

次の歌(二二七)とは田主の返歌、

遊士にわれはありけり 屋戸貸さず還ししわれそ 風流士には



ある

をいう。つまり田主は宋玉と同様の「節操高潔」を誇る「みやび男」。しかし、「なよびたる」石川女郎にとつては「遅鈍・愚鈍」な「みやび男」でしかなかったという次第なのである。

「おその風流士」の反対が「はやの風流士」である点に思い至れば、また、その「はやの風流士」の用例が上代に見出せないことを確認すれば、『伊勢物語』初段がこの『万葉集』大伴宿禰田主・石川女郎の一件を踏まえ、戯れに「いちはやきみやび」の評言を造語したことが分かる。「昔男」はあの田主とは違う、というわけだ。もちろん宋玉とも同じではない。その意味では、初段を「登徒子好色賦」と関連づけて詳細に論じた倉又幸良氏が、「好色賦」中の「秦の章華大夫」、すなわち、宋玉の無料を難じて少年時の旅に麗しい処子を発見して詩を送った体験談を楚王に語った、この「いちはやきみやび」男に注目するのは故なしとしない（『登徒子好色賦』「いちはやきみやび」の物語の始動―『長岡工業高等専門学校研究紀要』33―、一九九七年）。

\*

こうして初段は「昔男」の若き日の旅中の体験談、「ついで」の色好み譚である。詠歌中の「しのぶの乱れ」に源融歌を響かせていたとすれば（ただしこれには『闕疑抄』の幽斎が「於在中将、非幾先達、如何。定家卿物也。」を引いて定家の不審を是としている。業平（八二五―八八〇）、源融（八二二―八九五）から見て、「女はらから」に融歌が知られていたかどうか）、「昔男」は自らを「陸奥」からの旅人と騙って韜晦しつつ「春日野の若紫の摺り衣」の「なまめき」に戯れたことに

なる。それはともかく、いずれにしても初段にいう「みやび」はB（「みやび」を「好色事」と解する説）に軸をおくA（巧みに情景に適合した本歌取りの歌を表現し伝達した手順を「みやび」と称したのだとする説）であつて（前掲岡崎義恵論文「初段」「いちはやきみやび」ハ）狭くれば折に合った文雅の行をしたことであり、広くれば好色道や美的趣味を解することにもなるであらう。）、「精神的自由」「人間の回復」「自在でありうる、したたかな精神」などとはかかわりがない。

『伊勢物語』の「昔男」に「精神的自由」「人間の回復」「自在でありうる、したたかな精神」を探る心性が何に由来するものかは今問わない。けれども、このようにして「伝統」が現代においても聞く者になじみの言葉で創られていることは、「創られた伝統」（E・ホフスボウム、T・レンジャー編、一九八三年）や『創造される古典―カノン形成・国民国家・日本文学』（ハルラ・シラネ、鈴木登美編、一九九九年）の議論を待つまでもなく、確かなことのようにだ。とすれば、私たちの現在をメタ化するためにも、やはり継承（読みと表現）の間の改変、更新、創造といった行為と出来事に焦点をあてた「伝統的な言語文化」の教材化、学習指導は必要だろう。少なくとも古典教室は、「伝統」の「不変」を詐称する場であつてはなるまい。

\* 以下、『論叢国語教育学』復刊第3号（通巻8号、広島大学国語文化教育学講座、二〇一二年七月発行予定）に続く。

（広島大学）